兵庫生物　14（2）：151－156，2011

森為三先生に関する追加情報

鈴木　　武

韓氏同行に前後して、森先生に関しての追加情報を説明する。

○河合雅雄先生

河合雅雄先生（兵庫県立人と自然の博物館名誉館長）は，森為三先生が兵庫農大在任中に助手として在籍されていたので，韓先生とお会いできればと調整したが，都合がつかなかった。その当時の森先生は，深海魚に凝っていたとのことであった。

○森先生採集の標本

東京大学総合研究博物館に朝鮮産カエル標本があることが確認できた。

○森先生の自筆原稿

今回の韓氏の来訪に際して，森為三先生の自筆稿を大阪・鶴橋の古書店で入手できた。「日鮮の動植物の関係」というタイトルで，1952年に朝鮮学会会報に掲載された原稿である。入手しがたい論文であり，現在でも興味深いものであるので，ここに原文を掲載する。会報は縦書きガリ版刷りである。転載を許可いただいた朝鮮学会に感謝する。

『朝鮮学会々報』No.11　1952.2.1

「日鮮の動植物の関係（一）」　　森　爲三

一．日本の地史大略

日本の現代の動植物の分布狀態を生じたる原因及朝鮮との関係を知るには地史から述べなければならぬ。

日本の地史に就いては種々の学説があるが第三紀以前は陸地は狭く大部分海底であった。それが第三紀になり陸地が隆起し亜細亜大陸の縁辺部となり，大陸と接続して居ったが，ただ日本海だけは湖水の如くなっていた。したがって日本海の約半分は第三紀地層からなっている。それが第三紀始新世の頃，秋津沈降により津軽海峡が出来，日本海は入り海となり本州と北海道とは隔離され，また琉球列島の一部に於いて台湾や南支那を含む地域と日本が隔離された。しかしその頃は北海道と樺太とは尚陸続きでシベリヤ東端の縁辺部をなしまた本州・九州などは朝鮮と陸続きであった。

第三紀漸新世に至り，富士火山帯活動し陸地は一時隆起したが，中新世今から三千五百万年前瑞穂沈降により対馬海峡又は朝鮮海峡で朝鮮から日本が離れ，瀬戸内海の陥没によって四国・九州が本州から分離した。それと共に宗谷海峡により北海道と樺太と離れて，日本は現在の如き島国になったのであろうと云われる。

第三紀の終り頃火山の噴火甚しく，敷島隆起に依り対馬海峡が陸橋になったり，其の後断絶したり，気候も温暖になったり（北海道よりカシ，クス，イチジク等の化石が出ている），寒冷となったり，第四紀洪積世になっても寒暖交互に来り種々変化して現代になった。

したがって動植物も其の環境の変化を受けて現代の動植物となった。

かかる地史的及気候的変遷から現在の日本朝鮮の動植物の分布狀況及び過去の動植物の化石の狀態が理解されるのである。即ち津軽海峡が対馬海峡及朝鮮海峡より古くから出来ていることは本州･四国･九州（之から，これを本土と言うことにする）の動植物が北海道より朝鮮に類縁の深いことが解されるし，日本の動植物に亜熱帯の分子の存することも日本が太古，台湾・南支那と地続きなりしことより理解されるのである。

二．化石動植物

先づ第三紀の化石植物から述べると朝鮮の吉州･慶州等から出るものと，日本の長崎･岐阜･仙台･和歌山･神戸附近等から出るものと似たものが大辺多い。著例を述べると，現今世界で最大の巨樹と言わるるセコイヤ（巨人木とも書かれ高さ三七〇呎茎の径二十四呎，切り株の上で二十余人がダンスが出来ると言う）

兵庫県立人と自然の博物館

が北米のロッキ山脈以西の山間の渓谷で温暖多湿な夏に霧の多い地方に生育している常緑の針葉樹で，その巨樹のある地方は，セコイヤ国立公園として保存されている。現今は該地方のみより生育していないが，第三紀には北半球の各地より化石として現われ，日本や朝鮮にもその化石の産地がある。もとセコイヤと混同して居ったが，大阪市立大学三木教授に依り，葉は対生し落葉性で果実の鱗片の形も異なると言うのでメタセコイヤと名付けられたものが，日本の各地から化石が出ると共に朝鮮からも出ている。このメタセコイヤは其の後セコイヤと同じく北半球各地から化石として出ることが知られてきたが，特に興味あることは，化石としてのみ知られて居ったメタセコイヤが支那四川省萬県から，湖北省利川県にかけて八百方粁の狭い範囲に約一千本位，クリ・カシワ・マツ・イチイなどと混じって生育していることである。その他ブナ（日本には現在自生しているが朝鮮には自生していない）・シデ・クルミ等の化石が日本からも朝鮮からも出で第三紀時代陸続きなりしことを證する一助となる。

動物の方に於いても，象や犀や馬の化石が日本・朝鮮両方ともに出ている。著例を言うと，トリロホドンと言う古代象が朝鮮慶州炭坑から発掘されたが，日本の岐阜県及仙台附近からも出ている。第四紀洪積世になり初期の温暖期に朝鮮の吉州から印度系のナルバタ象の臼歯の化石が出で，日本では東京都をはじめ瀬戸内海沿岸の各地から出ている。それが寒冷の氷河期になると全身毛で被われた多毛象，即ちマムモス及蒙古野馬・驢・赤鹿等の化石が朝鮮日本から出で，植物に於いても東京や西宮附近からカラマツ・テウセンゴヨウ・タウヒ・シラベ等の寒地植物の化石が出ている。これ等も日本が大陸と地続きなりし事を證するものである。また第三紀に日本海が海であったことは朝鮮の吉州の中新世から鬚鯨・ウニ・ヒトデ・種々の海産貝類が出ていることから證される。

三．現生植物

次に現生の動植物に移って，植物から述べると，本州・四国・九州の各地に普通に生育している赤松・黒松は北海道にはなく（北海道南部にある赤松はその後移植したもの）朝鮮では赤松は北方蓋馬高地を除くと北の国境迄分布しており，黒松は中部以南の海岸地帯に分布して居る。この松は満州では満州黒松，西比利亜では西比利亜赤松，支那では支那赤松で別種である。之に対し北海道にはトドマツ・クロエゾマツはあるが本州には分布していない。栗も日本本土と朝鮮とは同種の原生種で朝鮮で揚州栗と言い中部以南に産する。北海道には栗はなく，支那の栗は小粒美味の甘栗で朝鮮の平壌地方に植えられ平壌栗と言っている。一位の一種の大山伽羅木が中国地方の高い山に生えているがこれが朝鮮中部金剛山の南の雪岳山の高い處にあり，エヒメアヤメと言う矮性可憐なアヤメが朝鮮至る処の山野に自生しているが日本では愛媛県石鎚山にあることは分布上興味あることである。其の他朝鮮に多く自生し九州・四国・本州に分布しているが北海道にはないものには，テウセンノギク・チャウジガマズミ・ゲンカイツツジ・テウセンヤマツツジ・サイコクリンダウ・カウライシロスミレ・キスミレ・ヒメマユミ・カウライウマノスズクサ・ノヒメユリ等（以上多く日本の西部地方）

ハヤザキヘウタンボク・ケシヨヤナギ・チリメンドロ・モンゴリナラ・タウカンバ・ヤエガワカンバ・テウセンゴヨウ等（以上多く本州の中部地方）

上記の事実は日本本土と朝鮮と植物分布に於いて，北海道よりも密接なる関係がある事を物語っている。

もっとも北海道はもと樺太と共に西比利亜東部と陸続きであったから西比利亜東部・樺太を通じ北海道と朝鮮の北部蓋馬高地とは植物に於いては左記の如き同種なものがある。

シロヨモギ・エゾムラサキツツジ・ネムロブシダマ・エゾキヌタサウ・エゾオホバセンキュウ・エゾノウワミヅザクラ・エゾウコギ・オホバボダイジュ・センダイハギ・クモマユキノシタ・チジマザサ等

朝鮮所産植物の種類は三千六百余種類あるが，日本と同種のもの二千余種で過半数を占めて居ることは注目すべき事である。

『朝鮮学会々報』No.12

「日鮮の動植物の関係（二）」　　森　爲三

四，現生動物

現生の動物に就いて云うと，先づ哺乳類に於いては日本本土と朝鮮とに棲息して居て北海道に居ないものに

モグラ・ヂネズミ・イヘカウモリ・ヒナカウモリ・ユビナガカウモリ・ムササビ・カヤネズミ・クログマ・テン・ヰノシシ・カモシカ等

熊は日本と朝鮮と種は異なるが同じ黒熊系統で北海道には羆（北朝鮮には其の系統のものがある）がいる。鹿も本土と朝鮮とには同系統の斑紋鹿であるが北海道のは蝦夷鹿である。羚羊は本土と朝鮮とは種は異なるが北海道には羚羊は居ない。

もっとも北海道はもと西比利亜と地続きであったから，北方寒地性のナキウサギ・シマリス等同系統のものが北鮮に棲息している。

哺乳類の中，猛獣は日本には熊の外居らぬが，朝鮮には虎・豹・山猫・大山猫・朝鮮狼・狼などの猛獣が居り，それにけもの獐（ノロ）牙獐（キバノロ）の如き鹿類及び猬（ハリネズミ）などがいる。これらは日本が対馬海峡が出来てから後，大陸から渡来して来たものと思う。日本本土には猿・カハネズミ・ヒミズなどの朝鮮にいない熱帯性のものもいることは，太古南支那と地続きなりし事を知る材料になる。

鳥類は空中を飛翔するので哺乳類の如く正確には論ぜられないが，日本本土と朝鮮とに棲息して北海道にいないものは

ヲナガ（朝鮮はコマヲナガ）・オホカラモズ・チゴモズ・サンショウクヒ・サンコウチョウ・セッカ・カラアカハラ・イハヒバリ・アカハラツバメ・コシアカツバメ・ヤイロチョウ・ホトトギス・ジウイチ・チャウゲンボウ・カタシロワシ・カクレミノ・オホノスリ・クマタカ・トビ・サシバ・ナベカウ・クロツラヘラサギ・ムラサキサギ・ダイサギ・コサギ・カラシラサギ・アカツクシガモ・シラコバト・コジャクシギ・ツルクヒナ等

哺乳類と同様に北海道と北朝鮮とには北方寒地性のエゾライチョウ・ミユビゲラ・ヤマゲラ等の同系統のものがあり，日本本土には朝鮮にいない東洋系のアヲゲラ・ヤマドリ・アヲバト・カラスバトなどいるが其の種類は少ない。

爬虫類，両棲類に就いては日本本土と朝鮮とにおって北海道にいないものに，

ヤモリ・ヤマガメ・スッポン・ヒバカリ・ヤマカガシ・トノサマガヘル・ツチガヘル等

北海道には日本本土及朝鮮に於いて最も棲息するトノサマガヘルは居らず，エゾアカガヘルが普通にいるのである。また日本本土には朝鮮にいない東洋系のアヲガヘル・カジカガヘルがいる。

魚類の中，海産魚は海流により移動したりなどして同様に論じ難いので，同様の見地から論ずることの出来る淡水魚に就いて述べると，世界に於いて日本本土（しかもその中部以西）と朝鮮とだけより分布していない注目すべき淡水魚に

ヲヤニラミ・ムギツク・ウキガモ

の三種がある。ウキガモは朝鮮から熱河までひろがっている。其の他日本本土と朝鮮とに居って北海道に分布していない淡水魚に，

メダカ・ナマズ（移殖して北海道にいる様になった）・ギギ・アカザ・タウナギ・タビラ・ヤリタナゴ・ニゴヒ・モロコ・カマツカ・ヒガヒ・ドロモロコ・モツゴ・オヒカハ・カハムツ・ハス等がある。

北海道と北朝鮮とに分布して日本本土に居ないものはフクドジョウ位のものである。

蝶類に於いても中国地方に稀に捕獲され，天然記念物に指定さるるキマダラルリツバメは朝鮮には棲息するも，北海道には棲息しない。其の他日本本土と朝鮮とに棲息して北海道に棲息しないものには

クロアゲハ・モンキアゲハ・キテフ・ツマグロキテフ・ウラナミジャノメ・コジャノメ・ヒメジャノメ・ヒメヒカゲ・コノマテフ・ツマグロヘウモン・ナガサキイチモンジ・ヒロヲビイチモンジ・キタテハ・スミナガシ・ウラギンシジミ・クロシジミ・ミヤマカラスシジミ・ムラサキシジミ・ウラナミシジミ・チャマダラセセリ・アヲバセセリ・ダイメウセセリ・アカセセリ・キマダラセセリ・ホシチャバネセセリ

等多数ある。

之に対し北海道と北朝鮮とに分布し日本本土に棲息しないものは，ヂャウザンシジミ・タカネセセリ・ウスバキマダラセセリ等極めて少数である。

上に述べた様に，本土の動植物の分布は北海道より朝鮮に近く化石種も現生種も同型のもの多く，したがって対馬海峡や朝鮮海峡が陸橋になったり離れたりしたが日本本土が朝鮮から最後に分離したのは極く最近の第四紀下部沖積世の頃らしい。

五，家畜

私が朝鮮の石器時代の遺跡や貝塚から出土した動物の骨の中に多数の家畜の骨があり，之を調べて見るとその家畜は日本から出土し骨により判定された家畜と同型のものが多い。

現在の家畜も調査すると日鮮の間に密接なる関係がある。

犬について言うと，朝鮮では金海・東莱・平壌等の遺跡からその遺骨が出土しているが，調査すると小形の杭犬種・中形の灰犬種共に日本の各地から出土したものと同型である。現在の日本犬は聳耳巻尾で東亜固有の犬であるが，朝鮮の西南の珍道にいる珍道犬は稍小形で私が調べると日本の紀州犬に最も近く，それで日本犬として多数日本に送られ財産を作った人もある。また朝鮮の東北の山地に棲む豊山犬は虎斑紋のあるものもあり，稍大形で甲斐犬に最も近い。

馬は朝鮮では平壌・吉州その他から出土している。これらを調べると蒙古馬系の大型と朝鮮矮馬系の小

型とある。この朝鮮矮馬系の小型のものの遺骨が日本に於いても熱田・出水等の遺跡から出土している。現在の朝鮮の矮馬は朝鮮や支那の古記録によると，矮小なるをもって三尺馬，又は果下馬と書かれているが，日本の隠岐馬，対馬馬，木曽馬と同系で支那の四川省雲南省の山地に居る土産馬の川馬から由来している東亜の矮馬である。この朝鮮馬は済州島に於いて多数飼育され，毎年多数朝鮮半島に移出されている。

牛も望月瀧三氏の調査によれば原牛（ボス・プリュミゲニュース）の遺骨が平壌の石器時代の遺跡から発見され，これが現在の平壌牛に由来し其の系統が日本の山陰地方に見らるゝ体色黒く肉の美味なる牛となっているのである。

かくの如く野生の動植物が日鮮の間に於いて密接なる関係あるのみでなく，人類の飼養する家畜も前述の如く同系統のものが大部分を占めている。この家畜はそれを飼養する人類と共に移動することが多いから，日本人も朝鮮半島から移動して来たものが多いことが推知せらるるのである。（兵庫農科大学教授・理博）

○森為三先生の論文

韓先生へ郵送したコピーの内容は次の通りである。3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震による津波で交通網が大混乱であり，予定通り韓先生の手許に届くか心配している。

『朝鮮博物學會雜誌』

第三號　大正十四年十二月十五日發行　朝鮮博物學會

○朝鮮ノ雉ニ就テ　p.21 － 34

○咸鏡南道高地ノ淡水魚ト胡蝶類　p.54 － 59

第四號　昭和二年一月十日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○白頭山及附近高地帯ノ胡蝶類ト其の分布　p.21 － 23

○ Two New Plants from Mt. Hakuto　p.24

○白頭山ノ植物區系ニ就テ　p.25 － 28

○白頭山植物目録（梶原梅次郎と共著）　p.39 － 54

第五號　昭和二年六月十日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○ On Two New Mammals from Korea　p.28 － 29

○ On Four New Fresh Water Fishes from the River Liao（遼河), South Manchuria　p.30 － 33

○遼河ト黒龍江トノ淡水魚ト其ノ動物地理的分布ニ就テ相互ノ關係ヲ論ズ　p.34 － 53

○水原西湖ノ魚類　p.54 － 56

○鳥ト食物ト農林業トノ關係　p.85 － 87

第六號　昭和三年三月二十五日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○濟州島ノ兩棲類及爬蟲類ニ就テ　p.47 － 52

○ On a New Hynobius from Quelpaert Ils.（濟州島）　p.53 － 70

第七號（御大典記念號）　昭和三年十二月二十五日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○牛馬ノ糞ガ好物ノ金龜子類　p.5 － 9

第十號　昭和五年七月三十一日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○ A New Species of Microtus from Korea　p.53

第十一號　昭和五年十二月三十一日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○朝鮮産アカボシウスバシロテフ（Parnassius bremeri Felder) ノ翅ノ變異ニ就テ　p.50 － 52

第十三號　昭和七年四月二十日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○旅順港外孤島ノ「シベリアマムシ」Agkistrodon halys Strauch ニ就テ　p.24 － 25

第十四號　昭和七年七月二十日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○朝鮮産「ゲンゴロウ」科ノ一新種ニ就テ　p.49

○朝鮮産『ゲンゴロウ」科目録　p.50 － 53

第十五號　昭和八年一月三十一日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○「テウセンクロライテウ」Lyrurus tetrix Koreensis Mori 咸鏡南道に分布ス　p.97 － 98

○「アカボシウスバシロテフ」Parnassius bremeri conjuncta Stgr. 朝鮮ノ南方慶州ニ於テ採集サル　p.98

○「テウセンミンミン」Oncotympana coreana Kato ノ綠化種　p.98

第十六號　昭和八年七月三十一日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）

○朝鮮産翼手目二種ニ就テ　p.1 － 3
○ On Two New Bats from Corea　p.4 － 5
○朝鮮ノ「チョウザメ」ニ就テ　p.6 － 10
○ A New Species of Leptobotia, Cobitinae, from Manchuria　p.13
○朝鮮ノ「キリギリス」科ニ就テ（豫報）　p.50 － 56
第十七號　昭和九年二月二十八日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）
○ One New and Two Unrecorded Species of Cyprinidae from Manchuria　p.57 － 58
第十九號　昭和九年九月三十日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）
○補訂朝鮮産魚類目録（内田惠太郎と共著）　p.12 － 33
○朝鮮ニ於テ發表セラレシ朝鮮脊椎動物ノ文献目録　p.170 － 175
第二十號　昭和十年四月三十日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）
○京都帝國大學冬季白頭山探検隊ノ採集セシ鳥類及哺乳類ニ就テ　p.10 － 14
○コノ頃噂サノ藥蟲　p.63 － 64
第二十二號　昭和十二年九月一日發行　朝鮮博物學會發行（京城第一高等普通學校博物教室内）
○鬱陵島産小形哺乳類　p.40 － 42
○朝鮮産 Calosoma 屬ノ甲蟲ニ就テ（趙福成と共著）　p.56 － 58
○壹岐島産淡水魚類　p.94 － 95
第二十三號　昭和十三年九月一日發行　朝鮮博物學會發行（京畿公立中學校博物教室内）
○鬱陵島産小形哺乳類（其ノ二）　p.16 － 18
○朝鮮鳥類目録に一種ヲ追加　p.32
第二十七號　昭和十四年十二月二十日發行　朝鮮博物學會發行（京城帝國大學醫学部微生物學教室）
○遮日峯採集ノ鳥獸類ニ就テ　p.1 － 4
○遮日峯ノ直翅目（趙福成と共著）　p.4
○蒙古ノ昆蟲類（其ノ一）（趙福成と共著）　p.26 － 39
第八巻　第三十一號　　昭和十六年六月三十日發行　朝鮮博物學會發行（京城帝國大學醫學部微生物學教室）
○蒙彊包頭附近ノ淡水魚ニ就テ　p.23 － 25
○蒙古ノ昆蟲類（其二）（趙福成と共著）　p.28 － 32
第九巻　第三十三號　昭和十七年一月三十日發行　朝鮮博物學會發行（京城帝國大學醫学部微生物學教室）
○朝鮮鬱陵島ノ天牛類ニ就テ（趙福成と共著）　p.12 － 17
○満州國所産天牛科甲蟲數種ニ就テ（其一）（趙福成と共著）　p.18 － 20
『人類學雜誌』
第四十四巻　昭和四年　東京人類學會
○朝鮮石器時代に飼養せし犬の品種に就て　p.43 － 52

『魚類學雜誌』
第五巻第一／二號　昭和三十一年一月三十日發行　魚の会
○隠岐島沖より得られた魚類の三新種　p.15 － 18

『朝鮮学報』
第一輯
○朝鮮の動物概觀　p.207 － 221
第九輯　昭和三十一年三月發行　天理教祖七十年祭記念號　朝鮮學會
○朝鮮の天然記念物総括（一，動物篇）　p.323 － 336
第十輯　昭和三十一年十二月發行　朝鮮學會
○朝鮮の天然記念物総括（植物篇）　p.83 － 112
第十一輯
○朝鮮の天然記念物總括（続植物・地質・鉱物篇）　p.43 － 59

No. 1

△かつて日本の陸地の多くは樺太・千島・地続きであつた。

日鮮の動植物の関係

森為三

日本の動植物の地理的分布は朝鮮との関係を知るには地史から述べなければならぬ。

日本の地史に就ては種々の学説があるが大体三紀以前は陸地は殆んど海底であつた。三紀に入り陸地が隆起し亜細亜大陸と連続して居つたがたゞ日本海だけは潮入りのぬくなつてゐた。△これが第三紀始新世の頃秋津洲海により津軽海峡が出来、日

No. 22

に続る形で樺太は稍々形を変じて私が話(る)と日本の紀州大に最も近くこれで日本大と一致する所日本に迄られ動植物を作つたこともある。また朝鮮の東北の山地に極め豊山、朱乙大は長白系のあるものもあり稍大形で甲斐大に最も近い。

馬は朝鮮では平壌吉州其の他から出土して居る。これらを調べると蒙古馬系の大型と朝鮮縄馬系の中型とある。此の朝鮮縄馬系の小型のもの遺骨が日本に於ても熱田、出川等の遺跡から出土して居る。

現在の朝鮮の縄馬は